

## 墓花に関する研究

### 1. 鹿児島市唐湊墓地における年間の 使用切り花の実態と分析

松尾英輔

(観賞園芸学研究室)

昭和63年8月10日 受理

#### Studies on the Dedication of Flowers at the Tomb of Ancestors

##### 1. Analysis of Seasonal Changes in Cut Flowers Dedicated at Tombs in the Toso Cemetery, Kagoshima

Eisuke MATSUO

(Laboratory of Ornamental Horticulture and Floriculture)

## 緒 言

本調査研究は鹿児島の墓地で使用される切り花(墓花)を調査し、どのような特性をもつ切り花がよく使われ、かつ求められているか、季節によってよく使われる切り花の種類が異なるかどうか、などを解明することによって、切り花生産と流通ならびに墓花用の新しい切り花の探索や育種に資することを目的とした。

欧米ならびに南米における墓地は広く、切り花が一年中供えられていて墓地公園的な性格が強いと言われる。筆者がオランダで観察したところでは、南部地域の墓地には切り花がきれいに供えられていたのに対して、北部地域ではそのような光景はほとんどみかけなかった。オランダの人々の説明では、カトリック教徒は墓に花をよく供えるのにたいして、プロテスタントはあまり供えることがないという。このようなカトリック教徒とプロテスタントの住んでいる地域の違いが墓地における墓花の多少に反映されているのである。

ところで我が国では、プロテスタントに似て、一年中墓に花を供えることは少ない。かつては命日には墓参りをして花を供えるのが普通であったが、近年では一年のうち正月、春秋の彼岸、盆の4回墓参りをして花を供えるのが一般的となっている。

ところが、南部九州ではかなり様子が異なる。すなわち、しばしば墓参りをして花が枯れないうちに花を取り替える。その結果、墓には色彩豊かな花が一年中絶えることがなく、初めて当地を訪れた人々の目を驚かす<sup>\*)</sup>。また、このように色彩豊かなので、墓地からうける暗いイメージは少なく、揖宿市

営墓地のように、花見を楽しめるような、墓地公園的な側面も持っている。

ともあれ、鹿児島では、墓や仏壇に供える切り花の割合が大きく<sup>1)</sup>、鹿児島市が全国一の切り花消費県都<sup>2)</sup>となる要因の一つになるとともに、切り花の評価基準、ひいては栽培法にまで影響を与える原因ともなっている。例えば、テッポウユリ (*Lilium longiflorum*) は全国的には2~3輪花が高価に取引されるのに対して、鹿児島では墓花用として多輪花ほど割高に取引されるので、鹿児島市場を主に出荷対象とするテッポウユリ切り花の栽培法は、他の産地のそれとは異なった側面をもつ<sup>3)</sup>。このように、鹿児島県下では墓に供えられる切り花(墓花)が多く、切り花の生産や流通への影響が大きいにもかかわらず、その利用実態は明らかにされていない。

本研究では、以上のような観点から、まず鹿児島市における墓花を1年間にわたって調査、分析してその実態を解明するとともに、墓花用としての切り花の生産、流通、さらには新しい墓花用切り花の探索、育種に資することをねらいとした。なお、花の生産や消費は一般に時代と共に移り変わる側面もあるので、本調査以後の顕著な墓花の変化については本文中にも若干ふれたが、詳細な内容については後報でふれることにしたい。

#### 調査地の概要と調査方法

本調査で取り上げた唐湊墓地は、1936年に開設された市営墓地である。小高い丘の谷面にあるが、市の中心地に近く、今では住宅に取り囲まれている。面積約10万平方メートル、墓数は約7,500基であり、隣接していくつかの民営墓地も設けられた、市

内最大規模の墓地である。当墓地は古く、市内にあって交通の便もよいので、高齢者だけでなく、若い人の墓参りも多い。墓地の近くには数軒の花店もあって、ここで墓花を求める人々も多い。このような背景から当墓地は鹿児島市民が墓花として一般的に使用する切り花の傾向を把握するのに適当な調査対象地と考えられる。

本調査では、墓地のほぼ中心部に調査域を設定し、切り花が供えられている200基について、1978年8月から1979年7月まで1年間にわたって、毎月1回、17～23日の間に、供えられた切り花の種類(原則として種を単位とした。)を1基ごとに調査した。

資料の取りまとめに当って、切り花の属性を、まず生態的特性によって草本、常緑木本、落葉木本にわけた。次に、緑色だけの切り花(葉、枝、花蕾<sup>23)</sup>など)であるか、それともそれ以外の色彩をもつ切り花であるかによって、緑ものと色ものとに分類し、さらに、利用部位によって枝もの(葉ものを含む)、花もの、実ものに分けた。なお、ナンテン(*Nandina domestica*)のように、冬には色付き実もの、夏には緑の枝物という具合に、使われ方の異なる切り花もあったが、本報告では、主に利用される部位とその色彩によって、その植物を取り扱った。

切り花利用の実態(利用度)を表現する指標として、出現回数と使用率を用いた。出現回数は、1年間にわたる月ごとの調査12回のうちその切り花が観察された回数で示し、使用率は、調査した200基のうちその切り花が観察された月ごとに墓数を百分率(%)で示した。なお、本報告では、出現回数4回以上または使用率10%以上の切り花を「利用度の高い切り花」、出現回数10回以上または使用率20%以上の切り花を「利用度の著しく高い切り花」と称した。

## 調 査 結 果

### 1. 観察された切り花の概要

調査期間中に観察された切り花は163種類(Table 1-A)、その内訳は草本91種類、木本72種類であり、割合は56:44であった。また利用度が高くなるにつれて、すなわち、出現回数が多いか、または使用率が高くなるにつれて、草本の割合は58%(Table 1-B)、63%(Table 1-C)とわずかながら増えた。

色ものと緑ものとの使用についてみると、色もの131種類、緑もの32種類で、その割合は8:2と色もの

のが圧倒的に多かった(Table 1-A)。しかし、利用度が高くなるにつれて、相対的に緑ものの割合が高くなった。すなわち、利用度の高い切り花(出現4回以上または使用率10%以上)に限ってみると、色もの71%、緑もの29%となり、さらに、利用度の著しく高い切り花(出現10回以上または使用率20%以上)にしぼってみると、色もの58%、緑もの42%であり、緑ものの割合は観察された全切り花についてみたときの2倍以上に増えていた。つまり、色ものとして使われる切り花の種類数は、利用度のいかにかわからず、緑ものそれよりも多かった。しかし利用度が高くなるにつれて緑もの切り花の割合は相対的に増加してきた。

利用部位別にみると、花ものが107種類と圧倒的に多く、全切り花の66%を占めた(Table 1-A)。次いで緑の枝ものが多く32種類(20%)であったが、花ものの1/3にも満たなかった。ところが、利用度が高くなると、花ものの割合は相対的に小さくなり、枝ものの割合が増加した。すなわち、利用度の高い切り花では花もの60%、枝もの29%となり(Table 1-B)、利用度の著しく高い切り花では、花ものは54%に低下し、枝ものの割合は42%に上昇した(Table 1-C)。

なお、色もの131種類のうち107種(82%)は花ものであり、その花ものうち79種(74%)は草本であった。また、緑の枝もの32種類のうち24種類(75%)は常緑木本であった(Table 1-A)。このように、色ものでは草本、緑ものでは常緑木本が圧倒的に多い傾向は、利用度が高くなってもほぼ同じであった(Table 1-B, C)。

### 2. 切り花の種類数の月別変化

切り花種類数は6月にもっとも多くて49種類、1, 7月がこれに次ぎ47種類、逆に少なかったのは10, 11月でそれぞれ、31, 30種類であった(Fig. 1)。

観察された切り花の中に占める使用率10%以上の切り花の割合は、多少の変動はあるが、1月から4月にかけて減少し、5～7月にはほぼ横這いとなり、その後8月にやや増えたものの、9月にはまた減少し、10月にもっとも少なくなった(Fig. 1)。このような傾向は使用率20%以上の切り花についてもほぼ同じであった。ただ使用率10%および20%以上の植物に共通して言えることは、1, 3, 8月にはその前後の月に比べてそれらの割合が著しく高かったことである。

Table 1. Classification and number of plant sorts observed during August, 1978 to July, 1979 at the Toso Cemetery in Kagoshima

Plant type	Showy plant			Sub-total	Green plant Branch or leaf	Total No. (%)
	Branch or leaf	Flower	Fruit			
<b>A) Total number of plants observed during the examination period</b>						
Herbaceous plant	3	79	4	86	5	91 (56)
Evergreen woody plant	8	10	7	25	24	49 (30)
Deciduous woody plant	2	18	0	20	3	23 (14)
Total	13	107	11	131	32	163 (100)
(%)	(8)	(66)	(7)	(80)	(20)	(100)
<b>B) Number of plants observed at higher frequency*1</b>						
Herbaceous plant	0	29	2	31	1	32 (58)
Evergreen woody plant	2	2	2	6	13	19 (35)
Deciduous woody plant	0	2	0	2	2	4 (7)
Total	2	33	4	39	16	55 (100)
(%)	(4)	(60)	(7)	(71)	(29)	(100)
<b>C) Number of plants observed at the highest frequency*2</b>						
Herbaceous plant	0	13	1	14	1	15 (63)
Evergreen woody plant	0	0	0	0	8	8 (33)
Deciduous woody plant	0	0	0	0	1	1 (4)
Total	0	13	1	14	10	24 (100)
(%)	(0)	(54)	(4)	(58)	(42)	(100)

\*1 Plants observed more than 4 times a year or at the tombs of more than 20 among 200 tombs checked.

\*2 Plants observed more than 10 times a year or at the tombs of more than 40 among 200 tombs checked.

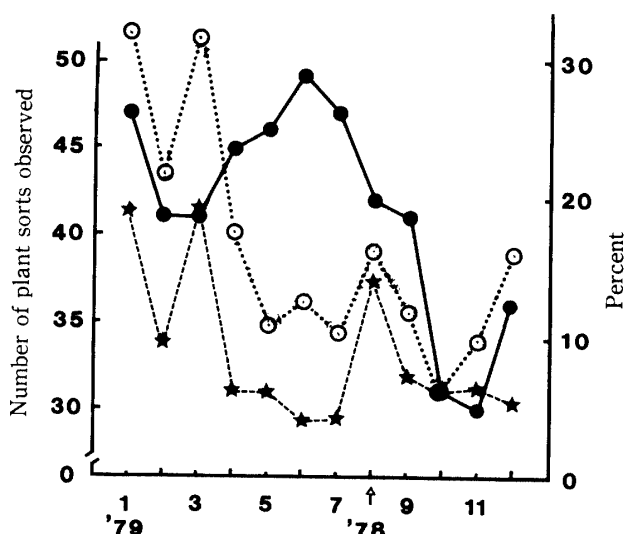


Fig. 1. Monthly changes in numbers of plant sorts observed (black circle) and those in percentages of plants observed more than 10% (white circle) or 20% (star) of tombs among checked 200 tombs.

木本と草本の使用状況を見ると、1~3月には木本と草本との割合はほぼ50%で同じであったが、それ以外の月では木本はほぼ35~40%と少なくなり、草本の方が多かった (Fig. 2)。また木本の内訳を見ると、落葉木本よりも常緑木本の種類が多かった。落葉木本は主に1~4月に観察され(ほぼ15~20%)、その後は減少し、10~12月にはまったく観察されなかった。

色ものならびに緑ものの使用という観点からみると (Fig. 3)、年間平均値は図中には示していないが、緑ものだけを供えた墓の年間平均値は19%、色ものだけのそれは14%であり、残る67%の墓では、色ものと緑ものとが併用されていた。いいかえれば、ほぼ80%の墓では年間を通して色彩の豊かな色ものを単独にあるいは緑ものと組み合わせて使用していた。ここに、供花の回数が少なく、しかもヒサカキ (*Eurea japonica*) が主体である北部九州に比べ

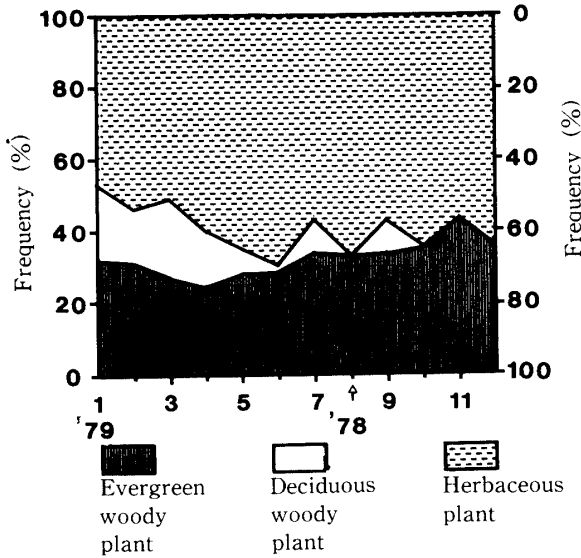


Fig. 2. Monthly changes in percentages of woody plants or herbaceous plants observed.

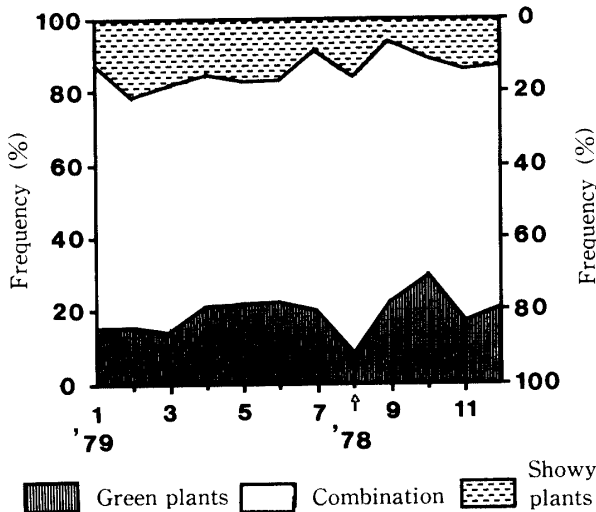


Fig. 3. Monthly changes in frequency of green plants, showy plants or their combination.

て、鹿児島墓地が色彩豊かで明るい理由がある。

月別にその動きをみると、極端な変動は少ないものの、まず緑ものでは8月に10%程度まで落ち込み、10月には30%にまで上昇した点が目だった (Fig. 3)。他方色ものでは、11月から6月までほぼ10数%から20%の範囲で変動し、7月と9月には10%を割ったが、8月には10数%に増加している点も注目された。

墓1基当たりの切り花種類数は、3月にもっとも多くて4.1種類、1月と8月がこれに次ぎ、それぞれ3.8と3.5種類であった (Fig. 4-上段)。逆にもっとも少なかったのは10月と11月で、その数はそれぞ

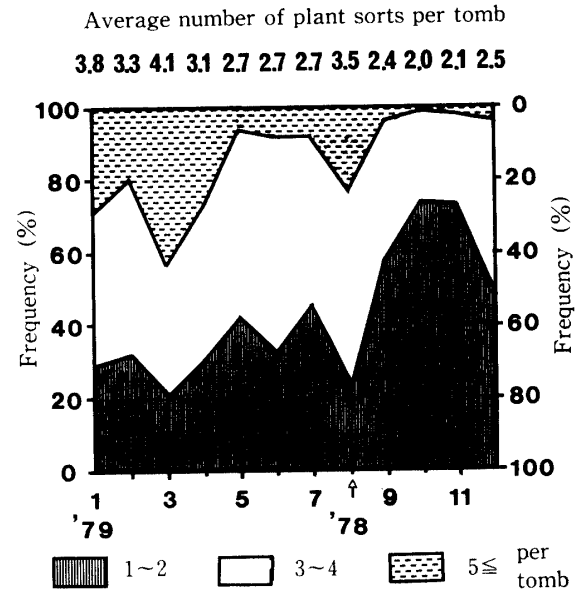


Fig. 4. Monthly changes in numbers of plant sorts observed per tomb.

れ2.0と2.1であった。

1基当たりの使用切り花種類数ごとにその割合を算出して Fig. 4-下段に示した。1基当たり1~2種類の墓数は10月と11月に特に多く、その割合はほぼ75%にも達したのに対して、これが少なかったのは3月と8月で、その割合はいずれもほぼ20%であった。他方、1基当たり使用種類数の多い、5種類以上の墓の割合は、3月に40%、8月に20%で、いずれもその前後の月に比べて著しく高かった。

### 3. 利用度の高い切り花

図表では示していないが、1年間に観察された切り花のうち、1~3回出現した切り花は118種類 (72%)、以下4~6回24種類 (15%)、7~9回11種類 (7%)、10~12回10種類 (6%)と3回以下の切り花がほぼ3/4を占めた。つまり、ほぼ1年間を通して使われる切り花はごくわずかの種類にかぎられているのである。このうち10回以上出現した切り花の内訳をみると (Table 2)、緑の枝もの7種類、花もの3種類であり、緑の枝ものが圧倒的に多かった。

これも図表には示さなかったが、1年間に観察された切り花のうち使用率10%以上の切り花は31種類で全体の19%、同じく20%以上の切り花は16種類で10%であり、特に後者のうち13種類 (81%)は草本性花ものであった (Table 2)。

利用度の著しく高い切り花24種類について、それぞれの月別の使用率を示したのが Fig. 5である。

まず緑ものでは、ヒサカキの使用率が年間を通じ

Table 2. Classification and plant sort observed at the highest frequency\*<sup>1)</sup>

	Showy plant		Green plant
	Flower	Fruit	Branch or leaf
Herbaceous plant	<ul style="list-style-type: none"> <li>●*<sup>2)</sup> <i>Patrinia scabiosaefolia</i></li> <li># <i>Dianthus caryophyllus</i></li> <li>#● <i>Chrysanthemum molifolium</i></li> <li>● <i>Antirrhinum majus</i></li> <li>● <i>Calendula officinalis</i></li> <li># <i>Gladiolus gandavensis</i></li> <li>● <i>Celosia cristata</i></li> <li>● <i>Matthiola incana</i></li> <li>● <i>Lilium longiflorum</i></li> <li>● <i>Dianthus barbatus</i></li> <li>● <i>Belamcanda chinensis</i></li> <li>● <i>Musa coccinea</i></li> <li>● <i>Freesia reflecta</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <i>Capsicum annuum</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <i>Sedum alboroseum</i></li> </ul>
Evergreen woody plant			<ul style="list-style-type: none"> <li># <i>Juniperus chinensis</i></li> <li># <i>Cleyera ochracea</i></li> <li># <i>Illicium religiosum</i></li> <li># <i>Cycas revoluta</i></li> <li>#● <i>Eurya japonica</i></li> <li># <i>Chamaecyparis obtusa</i></li> <li># <i>Chamaecyparis obtusa</i> var.</li> <li>● <i>Pinus thunbergii</i></li> </ul>
Deciduous woody plant			<ul style="list-style-type: none"> <li>● <i>Litsea cubeba</i></li> </ul>

\*1) For explanation, refer to Table 1.

\*2) ● : Plants observed at the tombs of 40 among 200 ones checked, and # : Plants observed more than 10 times a year.

て圧倒的に高く、60%を割ることがなく、最高は80%（1月）であった。アオモシ (*Litsea cubeba*) は1, 2月, マツ (*Pinus* spp.) は1月に多く使われていたが、出現回数は少なかった。残る緑もの、すなわちサカキ (*Cleyera ochracea*), シキミ (*Illicium religiosum*) など6種類は、使用率は10%以下と低いものの、ほぼ1年間を通して恒常的に使用されていた。

草本性切り花では、キク (*Chrysanthemum molifolium*) の使用率が年間を通して抜群に高く、50%を割ることはなく、最高は82%（11月）に及んだ。出現10回以上のカーネーション (*Dianthus caryophyllus*), ヒメバショウ (*Musa coccinea*) はいずれも使用率20%未満であった。使用率が20%を越え

た、その他の切り花の場合には、ある時期に集中して多用されており、その時期は切り花の種類によってやや異なっていた。すなわち、キンギョソウが2, 3月, ストック (*Matthiola incana*), テッポウユリ, キンセンカ (*Calendula officinalis*), フリージア (*Freesia reflecta*) が3月に多用されていたのに対して、ナデシコ (*Dianthus barbatus*) は3~5月, グラジオラス (*Gladiolus gandavensis*) は6月に、トウガラシ (*Capsicum annuum*), ベンケイソウ (*Sedum alboroseum*), ケイトウ (*Celosia cristata*), オミナエシ (*Patrinia scabiosaefolia*), ヒオウギ (*Belamcanda chinensis*) は8月に多く使われていた。

いずれにしても、圧倒的に使用率が高く、出現回

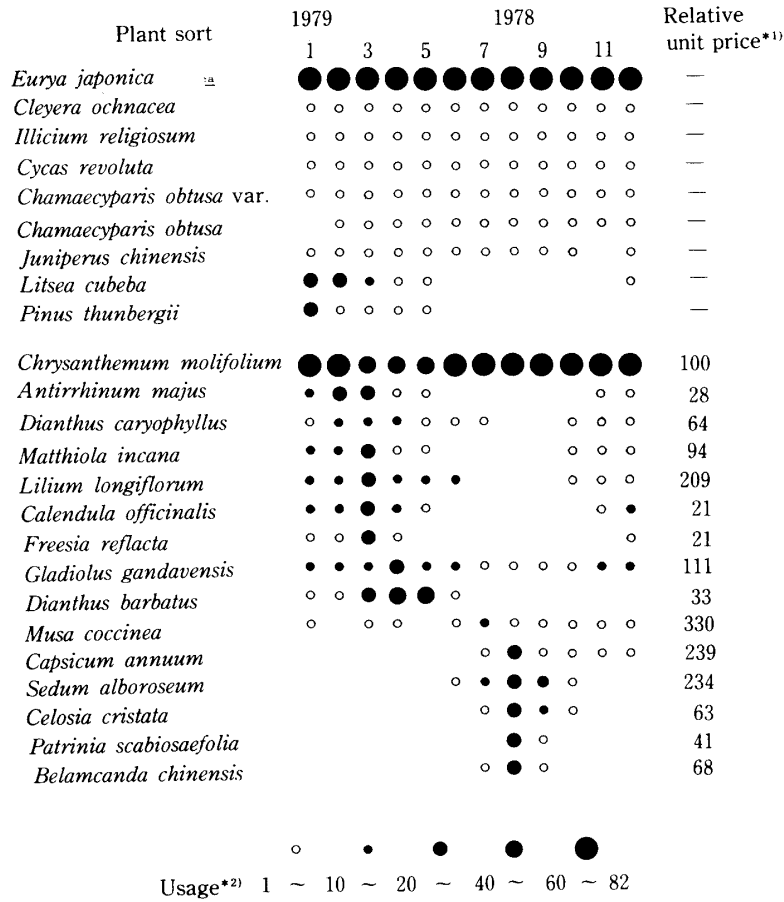


Fig. 5. Monthly usage of plant sorts of highest degree of observation and their whole-sale unit price.

\*1) Indices of monthly mean wholesale price of each plant, as compared to that of chrysanthemum.

\*2) Observation in percent.

数も多かったのは緑もののヒサカキと色もののキクであった。

### 考 察

#### 1. 切り花の種類別特色と月変化

鹿児島では年間を通じてさまざまな切り花が墓に供えられる。その内訳をみると、木本よりも草本が多く、また、緑ものより色ものが多い (Table 1)。色ものでは花もの、緑ものでは枝ものが大部分である。

月変化を概観すると、切り花の種類数は1月および4~7月に多く、10, 11月に少ない (Fig. 1)。1月に種類数が増える理由は明らかではないが、マツ、キンカン (*Fortunella* spp.), タケ (*Sasa arbo-marginata*, *Phyllostachys* spp.), ウメ (*Prunus mume*) など、松の内に供えた切り花のうち、1回に

使う量そのものは少ないが寿命の長いものが現実に残っていたことも理由の一つと考えられよう。4~7月、なかでも5~7月には切り花の種類は多かったものの、10, 20%という高い使用率を示す切り花の種類割合は概して低かった (Fig. 1)。これは次のような理由によるものとみられる。この時期には自然条件下で栽培される切り花の種類も量も豊富であり、したがって安価に入手できる (Fig. 5)。このため使われる切り花の種類数は多くなるが、一つの切り花が使われる頻度は少なくなる。その結果、多用される切り花の種類数は少なくなり、その割合もまた低下する。

10, 11月に種類数が少なかったのは、筆者の観察によると、1基当りのキクの使用量が増えたからである。この時期にキクが多く使用される理由として、大量に出回り、比較的安いことと季節の花として伝

統的に供えられることが考えられる。このようにキクの使用が増える結果、容量の決まった花筒に入れる他の切り花の種類や量は減少する。こうして1基当りの切り花種類数は減ってしまったのである (Fig. 4).

落葉木本は1~4月にかけてかなり観察されたが、その後は減少した (Fig. 2)。その内訳をみると、冬季には緑の枝ものとしてアオモジ、色の枝ものとしてミズキ (*Cornus controversa*)、カエデ (*Acer* spp.) など、春季には花ものとしてモモ (*Prunus persica*)、サクラ (*Prunus* spp.) などが使われていた。ところが夏から冬にかけて緑ものとして使われていたのはほとんどが常緑木本であり、この時期には落葉木本がほとんど使われていない点は興味深い。

3月と8月には、その前後の月に比べて、1基当りの切り花種類数が増加するとともに (Fig. 4)、20%以上の使用率の切り花種類数の割合が増え (Fig. 1)、特に8月には緑ものだけの墓の割合が著しく減る (Fig. 3) という現象が目立った。これは、日常の供花を花店に依頼している人が盆には墓参りをして自分で花を供えることと関わりがある。

すなわち、唐湊墓地の花店では、1978年当時、週に1回花を交換して1年間で、ヒサカキ12,000円、花もの24,000円で請け負っていた。依頼者の実数は明らかではないものの、かなりの数にのぼるとみられ、週末直前になると、花を交換してまわる花店の従業員の姿があり、一輪車に積まれた花にはヒサカキが多かった。このように、供花を花店に依頼している人々が自分で墓参りに来て花を供えるとき、ヒサカキだけでなく、見映えのよい色ものをも使用したくなることは、競って花を供えるという傾向がある<sup>4)</sup>ことから推察できる。その結果として、8月には1基当りの切り花種類数が増え (Fig. 4)、緑ものの割合は減少した (Fig. 3) と考えられる。

鹿児島では、盆のほかに正月と春秋の彼岸中日にも墓参りが多い。前述のように、3月彼岸後の墓花では8月のそれと似た傾向がみられたものの、1月と9月には類似の傾向は明らかではなかった。これは次のような理由によるものとみられる。1月の場合には1月19日の調査までに、おそらくは2回くらいの供え替えが行われて、松の内に供えられた切り花の種類はかなり少なくなっていたこと、9月の場合には彼岸中日 (9月23日) 前の20日に調査したので、この時には彼岸中日の墓参りに伴う墓花の交替はまだ行われていなかったことである。

その後、正月松の内および彼岸中日の前後の墓花を調べた結果によると、例えば供花率 (花が供えられている墓の割合) はそれらの直後に高くなり、緑ものの割合は逆に低くなった (松尾、未発表)。つまり、平常の供花を花店に依頼している人が、これらの折りには自分で墓参りをして花を供えていることが明らかであった。

2. 多用される切り花

1) 緑ものと色もの代表的切り花

Fig. 3にみられるように、墓花として用いられる切り花には緑ものあるいは色ものが単独に供えられる例よりも、両者が組み合わせて供えられる例が多い。つまり、緑ものと色ものとの併用が供花の原則となっているとみることができよう。

それらの緑ものおよび色ものの中では、それぞれヒサカキとキクの利用率が他の切り花に比べて抜群に高いこと (Fig. 5)、この両者を組み合わせて供える墓は年間平均で約45%、最低でも35%を下らないこと (Fig. 6) から、ヒサカキとキクは墓花の基本花となっていることが分かる。

ヒサカキは、鹿児島地方だけでなく、福岡地方でも伝統的に墓花として使われてきた植物であるが、鹿児島ではその地位は今なお変わっていないのである。

2) 見映え

鹿児島では、昔から色ものを墓に供えていたこと

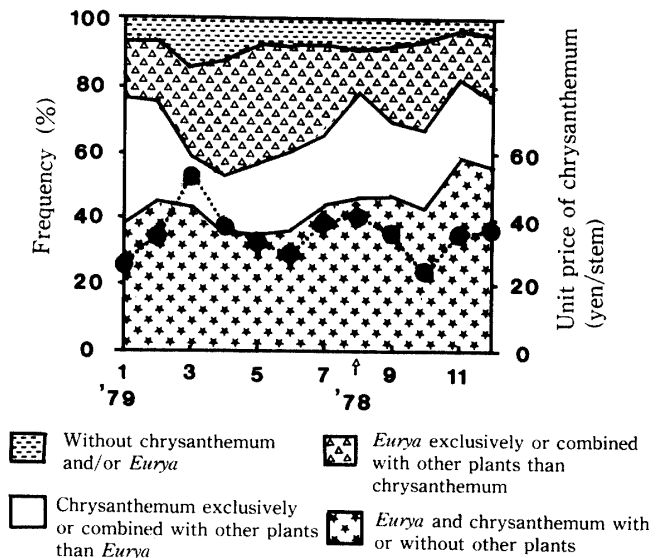


Fig. 6. Monthly changes in usage of *Eurya japonica* and chrysanthemum and those of wholesale price of chrysanthemum (black circle).

が、明治時代の新聞記事<sup>5)</sup>によってうかがわれるが、色ものを競って使うようになったのは、個人墓が家族墓に改築されてからであることが指摘されている<sup>4)</sup>。

事実、墓花として使われる切り花の種類としては色ものが圧倒的に多く (Table 1), 緑ものだけを供える例は年間平均で 20% を下回り、残る 80% 余は色ものと緑ものとの併用または色ものだけを供えている (Fig. 3)。また、色ものでは、キク以外にも、高い頻度でいろいろな時期に使われる切り花があるのに対して、出現回数の多い緑ものうち、ヒサカキ以外の緑ものの使用率は 10% 以下と著しく低い (Fig. 5)。さらに、サカキは九州では神道の墓に、シキミは仏教の 1 宗派の墓に、もともとは単独で用いられたものであるが<sup>6)</sup>、最近ではこれに色ものを添える例が多く、サカキでは 46%、シキミでは 54% にも達している (Table 3)。また、前に述べたように、3 月、8 月には、多用される花ものの種類が特に多い (Fig. 5)。

これらの事実は、新聞で指摘されているように<sup>4)</sup>、見映えの良い色ものが競って使われるようになってきていることを示している。

### 3) 日持ち

墓花としての切り花が、主に屋外で使用される鹿児島では、気象の変化—例えば、強い日光、昼夜の温度変化、雨や風など—に耐え、かつ日持ちが良いことは、経済的負担を軽くするうえでも欠かせない墓花の条件である。

緑ものの切り花 (Fig. 5) が、これらの点ですぐれていることはいうまでもないが、見映えの点では色ものに劣る。

それでは、利用度の著しく高い色ものについては

どうであろうか。まず実ものであるトウガラシは文句なく気象の変化に強く、日持ちが良い。花ものであるキク、キンセンカ、カーネーションは比較的花弁が厚く、それ自体で日持ちがよい。その他の花ものでは、複数の花が着いていて、それらが次々と開花し、結果として日持ちが良くなるものが多い (Table 2, Fig. 5)。

### 4) 経済性

墓花が絶えないように供え替える鹿児島では、墓花代の経済的負担も無視できない。したがって墓花としては、見映えと日持ちの良さに加えて安価であることも要件となる。

そこで、利用度の著しく高い切り花の卸売単価を、もっとも日常的に使われるキクのそれと比較 (比平均単価) して Fig. 5 の右端に示した。なお、木本性の緑ものは束売りで、一本当りの単価が算出しにくいので、ここでは草本性切り花についてのみ算出した。

これによると、14 種の切り花のうち 10 種がキクとほぼ同じかそれよりも安価であった。ところがテッポウユリ、ヒメバショウ、トウガラシ、ペンケイソウの単価はキクの 2~3 倍となっている。これらのうち前 2 者は容姿がキクとは著しく異なり、大きさと見映えの点でキクに匹敵し、しかも日持ちの良いたことが多用される理由とみられる。他方トウガラシやペンケイソウは、見映えの点ではキクに匹敵するとは考えにくいだが、抜群に日持ちがよく、特に夏場の炎天下に耐える墓花として多用されているのである。

ところで、利用度の著しく高い草本性切り花 (Fig. 5) では、季節ものが入手できる時期に多用されるものが比較的多い。しかしながら、キク、カーネーション、ストック、テッポウユリ、グラジオラス、ヒメバショウのように、不時栽培もの出回りが多い切り花は使用率は高くはないものの、使用回数はかなり多い (Fig. 5)。このことは見映えがよく、日持ちのよい切り花が経済的に入手できるならば、その利用は年間を通じて伸びる可能性があることを示唆している。また、キンセンカ、ケイトウ、テッポウユリ、ナデシコ、ヒオウギなどは鹿児島では昔から墓花としてよく使われてきた切り花であるが、カーネーション、キンギョソウ、グラジオラス、ストック、フリージア、トウガラシなどは近年よく出回るようになり、墓花として多く使われるようになったものである<sup>6)</sup>。この事実は墓花としての必要条件を

Table 3. Usage of *Cleyera ochracea* and *Illicium religiosum* observed at the tombs in the Toso Cemetery in Kagoshima during August, 1978 to July, 1979

Usage	<i>Cleyera ochracea</i>		<i>Illicium religiosum</i>	
	Number of tombs	%	Number of tombs	%
Exclusively	28	44.4	32	33.6
Combined with green plants	6	9.5	6	7.2
Combined with showy plants	29	46.0	45	54.2
Total	63	100	82	100



備えた切り花が出現すれば、急速に伸びる可能性があることを示唆する。事実、その後の調査によると、比較的最近出回るようになった切り花の中で、スターチス (*Limonium* spp.)、プロテア (*Protea* spp.) など、色もので日持ちがよく経済的な切り花の利用が著しく高くなっていった(松尾, 未発表)。しかし同じように最近出回るようになった切り花のうちカスミソウ (*Gypsophylla elegans*) は、墓花として使われてはいるものの、スターチスやプロテアに比べるとその利用度は低かった。これはカスミソウの花が目立たないためであろう。また、日本における三大切り花の一つであるバラ (*Rosa hybrida*) は、鹿児島での市場取扱高は3.8%で、切り花の中では高いとはいえないものの、全国生産高の比率8.1%に比べると、半分以下であった(1978年度)。さらに、墓花としてのバラの利用は極めて稀であったが(1978~1979)、その後の調査でもごく稀にしか観察されなかった(松尾, 未発表)。このようにバラが墓花として使われない理由のひとつは、刺のあるものを墓に供えてはいけないという言い伝え<sup>2)</sup>が今なお生きているためであろう。

ともあれ、鹿児島の場合、全国のキク生産高が切り花のほぼ45%なのに対して、鹿児島市場でのキクの取扱高は55%を越え(1978年度<sup>3)</sup>)、キクは墓花として多用される(Fig. 5)。また墓花としてはヒサカキやシキミなど緑ものの利用も多い(Fig. 5)。これに対して、バラの取扱量は結構多いにもかかわらず、墓花としての利用はほとんどないなど、墓花と家庭用の花とはかなり異なる側面があることは特筆すべきことといえよう。

以上要するに、墓花としては緑ものと色ものとが併用され、特に色ものとしては見映えがよく、屋外の厳しい条件下で日持ちがよく、さらに経済的に有利な切り花が使われ、かつ求められている。したがって、今後このような条件を備えた切り花が見出されれば、墓花の様相は一変する可能性もありえよう。そして、このような切り花の探索あるいは育種にあたって注目されるのは乾燥地域の植物ではあるまいか。

## 要 約

鹿児島の唐湊墓地では1年間に163種の切り花が観察されたが、一つの墓に供えられる切り花は緑ものと色ものの組み合わせが多く、その中心となっている切り花は、緑ものではヒサカキ、色ものではキクであった。

調査期間中に観察された切り花の種類としては、緑ものより色ものが多く、その割合は80%であり、色ものの中では花ものが圧倒的に多かった。

利用度の著しく高い(出現回数10回以上または利用率20%以上)切り花は、緑もの10種類と色もの14種類であった。前者のうち9種類は常緑木本、後者はすべて草本であった。これらの切り花の特徴として、見映えがよいこと、日持ちが良いこと、単価が安いこと日持ちを考えたうえで経済的であることが挙げられた。

## 文 献

- 1) 鹿児島県広報課：県政モニターアンケート調査報告書、生活と花について、p 1-10 (1986)
- 2) 松尾英輔：墓花にみる奄美大島の地域性、九学会連合奄美調査委員会編、奄美-自然、社会、文化-、弘文堂、東京、p 378-385 (1982)
- 3) 松尾英輔：オランダと日本のテッポウユリ生産。p 1-257、春苑堂書店、鹿児島 (1986)

## 注

- 注1) 大園純也。1982。編集委員の目、なぜかお墓大事の鹿児島。南日本新聞8月12日。
- 注2) 総理府統計局。1986。家計調査年報による。
- 注3) アオモジとベンケイソウがその例であるが、月別取りまとめの際には開花後には色ものとした。すなわちアオモジは4、5月、ベンケイソウは9、10月には花ものとして取り扱った。しかし、1年間に観察された切り花の分類では、色ものとしてよりも緑ものとしての利用期間が長いので、緑ものとして取り扱った。
- 注4) 南日本新聞。1981年10月6日。地方記者の目、墓地改修と'村の遺産'。南日本新聞。1982年7月7日。地方記者の目、花盗人は風流のうち。
- 注5) 南日本新聞。1980年12月26日。郷土紙にみる世相百年-68-明治編
- 注6) 複数の高齢者からの聞き取りによる。
- 注7) 花き市場流通調査報告(鹿児島県農政課)による。

### Summary

This study was designed to investigate the seasonal changes of the sorts and the characteristics of cut flowers which were dedicated at the tombs of the Toso Cemetery, Kagoshima. Dedicated cut flowers were monthly checked at the sampled 200 tombs during August, 1978, to July, 1979.

Approximately 160 plant sorts were observed during the examination period, of which 6 parts were of herbaceous plants and 4 parts of woody plants ; or 8 parts of showy plants and 2 parts of green plants, in number, respectively.

Green plants and showy plants were in combined use in general. The number of plant sorts per tomb was different with month, being 4.1 (greatest) in March and 2.0 (smallest) in October. Mostly used plants were *Eurya japonica* for green plants and chrysanthemum for showy ones, these were observed at tombs of more than 50 % and 60 % among the checked tombs, respectively.

Plant sorts showing highest frequency of observation, *i. e.*, those which were observed more than 10 times a year, or at the tombs countering more than 40 among the checked 200 tombs, suggested that people dedicate or long to use the cut flowers which are showy, good in keeping quality and economical.